

INTERVIEW 3 社会を導くリーダー

# 人を助ける「つなぎ役」

震災の混乱で生まれた新たな英知。人

民ごころが官も未曽有の事態で機能不全になってしまった。だから、地域のみんなで助け合なアカンとなった。その答えの一つが、紹介してきたチャレンジの行動です。彼らの行動が、神戸の復興の一助になったのは知られざる事実です。

今回の震災でも、地域の一人ひとりが向き合って助け合っているけれど、必ず光明は見える。つらい状況やけど、必ず希望はあります。阪神・淡路大震災から復興できたのは、「支え合い」の心と行動があったからです。

民ごころが官も未曽有の事態で機能不全になってしまった。だから、地域のみんなで助け合なアカンとなった。その答えの一つが、紹介してきたチャレンジの行動です。彼らの行動が、神戸の復興の一助になったのは知られざる事実です。

今回の震災でも、地域の一人ひとりが向き合って助け合っているけれど、必ず光明は見える。つらい状況やけど、必ず希望はあります。阪神・淡路大震災から復興できたのは、「支え合い」の心と行動があったからです。

「チャレンジ」(Challenge)とは米国などで広まった言葉で、「挑戦する使命や課題を与えられた人」という意味です。でも実はチャレンジとは「障害者」だけやないんです。問題は困難に向き合うことができる人という意味もあります。今回の震災で被害を受けた人たちも、まさに「チャレンジ」。

財産をなくし、大事な家族も失って困難だらけと思えます。でも尋常やない課題や危機に正面から向き合って、必ず切り抜けていく力があると私は信じています。実は私も阪神・淡路大震災では実家を焼失するまで、プロップの活動から私生活まで、当時は困難だらけだったんです。

今回の震災では、携帯電話を片手に誰もが当然のようにネットを使い、メールを使って情報収集していました。今では何かあればネットを利用するのが当たり前ですが、危機状況の中でこれほどネットが使われるようになったのは、阪神・淡路大震災からなんです。しかも、チャレンジの行動から立ち上げたこともあり、阪神・淡路大震災では関係者すべてが被災しました。でも、「オレは生きてる」「誰それは大丈夫なんかに」と安否情報がパソコン通信で飛び交い、関係者全員無事であることが早い時期にわかりました。

「チャレンジ」(Challenge)とは米国などで広まった言葉で、「挑戦する使命や課題を与えられた人」という意味です。でも実はチャレンジとは「障害者」だけやないんです。問題は困難に向き合うことができる人という意味もあります。今回の震災で被害を受けた人たちも、まさに「チャレンジ」。

財産をなくし、大事な家族も失って困難だらけと思えます。でも尋常やない課題や危機に正面から向き合って、必ず切り抜けていく力があると私は信じています。実は私も阪神・淡路大震災では実家を焼失するまで、プロップの活動から私生活まで、当時は困難だらけだったんです。

今回の震災では、携帯電話を片手に誰もが当然のようにネットを使い、メールを使って情報収集していました。今では何かあればネットを利用するのが当たり前ですが、危機状況の中でこれほどネットが使われるようになったのは、阪神・淡路大震災からなんです。しかも、チャレンジの行動から立ち上げたこともあり、阪神・淡路大震災では関係者すべてが被災しました。でも、「オレは生きてる」「誰それは大丈夫なんかに」と安否情報がパソコン通信で飛び交い、関係者全員無事であることが早い時期にわかりました。

## シップとは

# のは人が創造生む

ときちんと向き合うことが助けになる

「チャレンジ」(Challenge)とは米国などで広まった言葉で、「挑戦する使命や課題を与えられた人」という意味です。でも実はチャレンジとは「障害者」だけやないんです。問題は困難に向き合うことができる人という意味もあります。今回の震災で被害を受けた人たちも、まさに「チャレンジ」。

財産をなくし、大事な家族も失って困難だらけと思えます。でも尋常やない課題や危機に正面から向き合って、必ず切り抜けていく力があると私は信じています。実は私も阪神・淡路大震災では実家を焼失するまで、プロップの活動から私生活まで、当時は困難だらけだったんです。

今回の震災では、携帯電話を片手に誰もが当然のようにネットを使い、メールを使って情報収集していました。今では何かあればネットを利用するのが当たり前ですが、危機状況の中でこれほどネットが使われるようになったのは、阪神・淡路大震災からなんです。しかも、チャレンジの行動から立ち上げたこともあり、阪神・淡路大震災では関係者すべてが被災しました。でも、「オレは生きてる」「誰それは大丈夫なんかに」と安否情報がパソコン通信で飛び交い、関係者全員無事であることが早い時期にわかりました。

## プロップ・ステーション 理事長 竹中ナミ

Nami Takenaka

たけなか・なみ ●1948年神戸市生まれ。重症心身障害の長女を授かったことから、障害児医療や福祉などを学ぶ。91年にプロップ・ステーションを発足。98年に社会福祉法人に。著書に「プロップ・ステーションの挑戦」、「ラッキーウーマン」。

要介護で自分の身体を自分で動かせないのに、「これでええんか。何か自分でできることがあるはずや」と、彼らは考え込んでいます。

当時はまだインターネットではなく、二フレイブやPCV A Nといった「パソコン通信」が全盛の時代。そこで思い浮かんだのが、パソコン通信の「掲示板」機能でした。この掲示板にアクセスすれば、一度に多くの人が同じ情報が見られます。たとえ「車いすの人が入れるお風呂はないか」と質問を上げると、「どこそこの老人ホームのお風呂なら入れませ」と誰かが答えてくれる。その情報をボランティアに伝えて、パソコン通信を使っていない人のために張り紙などにしてました。

1対1でしか伝えられない電話やファクスと比べると、非常に強力な伝達手段やっただけです。

自らも被災者だったチャレンジですが、通信ネットワークを駆使して仲間を支援するという、想像もなかった活動が生まれました。そして「パソコンボランティア」という言葉が定着していったのも、彼らの行動が始まりやっただけです。

誰もが茫然自失した中で、パソコンを通じて情報と人をつなぎ上げ、さらには人と人をつないだ。パソコンに、そんな力があったんやと気づいたんです。「なんや、パソコンなんてだたの機械の箱やんか」。パソコンが高価だった当時、そう揶揄されたこともありましたが、そんな機械であるパソコンを通じて、人と人が「向き合い」、人と「通じて」助け合えることができました。だから、プロップにとっては「IT」ではなく、「ICT」なんです。

1対1ではなく、「ICT」なんです。だから、プロップにとっては「IT」ではなく、「ICT」なんです。



撮影：梅田秀司

プロップとはもともと「支え合い」という意味です。阪神大震災でのチャレンジは、パソコンという道具を使って支え合い、人と向き合うことができました。これが大震災復興のキーワードになりました。

私はそんなプロップの理事長ですが、リーダーシップがあるか、あと考えると、違ふ気がする。強いパワーとカリスマ性で人を引く張つていくのがリーダーシップと思ふけど、私の場合はむしろ人と人のつなぎ役に徹することやからね。

私は自分のことを「つなぎのメリケン粉」と呼んでいます。社会にチャレンジを叩きつけてくれるメリケン粉のような存在や、と、だから、プロップの活動に誰かが必要となったら即、行動開始。強い心臓と口は私の特技やから、どんな相手でも「巻き込まなアカン」となつたんです。これまでプロップは、官公庁や企業をはじめいろんな人や組織と活動を共にしました。彼らはチャレンジ下に就労し納税者になつてもらうための最大のパートナーだからです。

とはいえ、ただ要求するだけでは絶対ダメ。どんな人にも、その人の思考方法や立場、組織の論理がある。相対する人が受け入れられるような論理とメリットを伝えることが必須。「してくれないから」と攻撃しても、何も生まれてくせん。

必要なのは「翻訳力」。これは、相手の立場に立って、相手の思考方式や論理構造を思いながら話すことです。「私たちが組んだら私はこうです。あなたはどうなる。1+1=5にできる」ということを、相手の言葉で話す。これが「つなぎのメリケン粉」の役目。相手が身を乗り出してくれるような接し方をしないと、どことどこもくっつきません。くっ

ついてこそ、何か新しいこと(おおいにお好み焼き)を生み出せる。だからこそ翻訳力が重要やと思つてます。

冒頭で「チャレンジは障害者だけを指すんやない」と言いました。高齢化が進み、介護を必要とする人が増えます。増えざる日本では、性別、年齢、障害の有無や文化の違いなどを超えて、すべての人が、自分たちの持っている力で社会を支え合えるような「ユニバーサル社会」を創り出さなければなりません。日本は今、全員がチャレンジともいえます。「ユニバーサル社会」を構築するために、「つなぎのメリケン粉」がもつと広がればと思っています。